

ギターの歴史（下）

小原安正

リョベートは1878年、バルセローナに生まれ。始めはアレーグレという先生にギターを学びましたがその当時未完成のタルレガに会い、「新しいギターの発見」の苦悩を全身に受けながらリョベートは成長しました。

1901年からスペイン国内は勿論、南米各国、北米、ヨーロッパ各国の演奏で熱狂的な歓迎を受けております。

彼の労作には「アメリカ姫の誓」「クリオーリョの唄」「尊敬」「商人の娘」などのスペイン民謡があって非常に価値の高いものです。

ブジョールも活発な演奏活動をしていましたが、だんだんと著作の活動に入るようになって著名な「ギター教程」を書きあげました。又、サンス、ミランなどを始めとするビウエーラやリュートなどの古い作品を現代の譜になおし、私たちに豊富な財産をもたらしてくれました。

フォルテアの門下生であったサイーンズ・デ・ラ・マーサはアグアドの伝統を正しく受けついで唯一のギタリストで、現在でも活発な演奏活動をしています。マドリード国立音楽院教授でした。

ナルシーソ・イエペスは独学の大家といわれています、エネスコ、ギーゼキングについて音楽を学んで、ピアノやバイオリンに匹敵するような新しい技術がギターに必要と考え、革命的で新しく、理論的な方法を発見し、タルレガ、セゴビアの技術を又一步。推し進めていることで、ギター界の重要人物となっています。

ウィーンには、ルイゼ・ワルカーとカール・シャイトという音楽アカデミーの教授がいます。

パリでは、イダ・プレスティ、アレキサンドル・ラゴヤ夫妻が二重奏でギターの可能性を拡大し、名演奏をかきせるので有名です。

ヴェノス・アイレスにはマリア・ルイサ・アニードがいます。ワルカーと共にリョベートの門下生だった人で世界的に著名でした。

最近ではイギリスのジュリアン・ブリーム、ジョン・ウィリアムス、ベルギーにはスペイン生れのヘスス・ゴンザ

レス・モイーノ。イタリアではベネズーラ生れのアリリオ・ディアス、オスカー・ギリア、オランダにはピーター・ファン・デル・スクーグなど多くの若いギタリストが活躍しております。

製作の方ではトルレスの門下として、サントス・エルナンデス、マヌエル・ラミレ、ドミンゴ・エステーソ、エンリケ・ガルシアなどが銘工として知られていましたが、今では全部亡くなり、その門下生又は親類の者が銘工になっています。

ホセ・ラミレス、フェルナンデス・アルカンヘル、ビクトリアーノ・アグアド、バルセローナのイグナシオ・フレータなどが高名です。他の国ではハウゼルが代表的だと思われれます。

日本のギター史は、まだ確立されていませんので私だけの考え方で分類してみると次のようになると思われれます。

- 第1期 ギター渡来
- 第2期 マンドリン合奏の発達と共にギターヘグ)関心が起こり、研究開始と共に発表会が開かれる
- 第3期 セゴビアの来日より第2次世界大戦まで
- 第4期 敗戦後現在まで

第1期

秀吉の面前でスペイン人が室内楽を演奏して彼がアンコールをしたという有名な話があります。これは時代から考えてギター又はビウエーラでなければなりませんから、この時がギター渡来の時期だとも考えられますが、これは確実とはいえませんので、時代を明治におろしてみますと、明治15年ごろギターは日本に入ったようです。

第2期

明治の後期になりますと、当時の上野の美術学校生徒の間でマンドリン合奏がさかに行われ、これにはギターを必要とするところから、そのパートのギタリストたちは必然的にギターを研究するようになりました。

大正4年、日本人で最初にギター演奏を公にしたのは関根文三という人でした。

大正10年3月『オルケストラ・シムフォニカ・タケイ』で初めて「ギターの夕」が催されて本格的な研究がされています。

ひきつづき日本ギターの父として尊敬されている故武井守成の「軒訪る秋雨」のようなギター曲が出版になって、当時の発展の様子がうかがえますが、大河原義衛などの努力にもかかわらず、本格的なギターの進歩は昭和4年のセゴビアの来日の後にゆずらねばならないでしょう。

第3期

昭和4年10月26日、帝国劇場でセゴビアのリサイタルが開けましたが、それまで日本のギターはカルカッソを中心に学んでいたために、タルレガの。又、セゴビアの新しい奏法にふれたのはこの日が最初のことでした。絃にガットを使い（現在ではナイロン）ギターの保持法、トレモロ、又は八度上のハーモニックスなどを現実に知ったのはこの夜が初めてのことでこれは誠に重大事件といわねばならなかったのです。

これから以後、セゴビアの後を追う「セゴビア主義」が日本に起こり、日本のギターはセゴビア一色に塗りつぶされる時代をすごしました。

沢口忠左衛門という真面目な研究家が仙台で「アルモニア」というギター雑誌を発行してギターの啓蒙につくしたのはこの頃です。

第4期

戦後になって最初に来演したのはアルゼンチンのアニードで、この人の演奏は私たちに非常にショックを与えました。それから引続きゴンサレス・モイーノ、ナルシーソ・イエペス、アニード、セゴビア、その他、ジョン・ウィリアムズ、ジュリアン・ブリーム、オスカー・ギリア、レナータ・タラゴ、シーグフリート・ペーレント、カルベル、アリリオ・ディアス、ファルネなどが来演し、日本のギター界に大きな刺激を与えた。日本のギター界も、外国の諸大家を迎え得るようすっきり成長したわけです。

忽論、日本のギタリストも大勢になり、日本ギター連盟によるギターコンクールも続けられて、優秀なギタリストを次々と生み出しています。

出版物も他の分野にくらべて圧倒的に多いし、東京音楽アカデミーの発足もあり、これからの日本のギター界は益々発展することでしょう。